変形性股関節症患者における人工股関節置換術後の回復過程について

学籍番号02M2420　氏名 吉田 大輔

1．研究目的

変形性股関節症（以下OA）にて人工股関節置換術（以下THA）を施行した症例の術後早期における回復過程を明らかにすること。

2．研究対象と方法

対象：OAにてTHAを試行した8例（男性1例、女性7例）。年齢は70.6±6.4歳（60～78歳）、罹病期間は26.4±22.3ヶ月（6～60ヶ月）であった。

方法：術前、術後2週、4週、6週経過時に股関節外転筋力、疼痛、日整会股関節機能判定基準（以下JOAスコア）、WOMACを評価した。疼痛はVisual Analog Scaleにて安静時痛、筋力測定時痛、歩行時痛を評価し、JOAスコアでは疼痛、可動域、歩行能力、日常生活を評価し、WOMACでは痛み、身体の動きの悪さ、日常の活動について評価した。また術前および術後6週経過時に10m自由歩行速度を測定した。

統計学的分析：統計ソフトはSPSS12.0を使用し、多重比較法、ピアソンの相関係数、スペアマンの順位相関係数を用い、有意水準は5%とした。

3．結果

1) 外転筋力の経時的変化：術後2週経過時には術前と比べて有意に低下したが、その後は増加し、6週経過時には術後2週経過時と比べて有意に増加した（$p<0.05$）。
2) 術前外転筋力：罹病期間が長い症例では術前外転筋力は低くなり、有意な負の相関を示した（$r=-0.72$、$p<0.05$）。
3) 自由歩行速度：術後6週経過時には、7例で術前と比べて低下していたが、有意ではなかった。
4) JOAスコア、WOMAC：術後2週経過時には改善する症例と低下する症例が見られるが、その後は有意に改善した（$p<0.05$）。

4．考察とまとめ

外転筋力が術後2週経過時に一時低下するのは、手術侵襲によるものと考えられる。一方、術前の外転筋力は罹病期間が長くなるほど低下していたが、これは術前に起こっている筋萎縮による廃用性筋力低下が原因と考えられ、罹病期間が長い症例については十分な筋力増強運動を行う必要があると考えられる。また、自由歩行速度は外転筋力と相関を示さなかったが、これは対象数が少ないことや、自由歩行速度が外転筋力の程度に影響されないものである可能性が考えられる。外転筋力をはじめ、JOAスコアやWOMACは症例により回復過程に違いが見られたが、これは術後の疼痛軽減の程度、罹病期間、術前の活動性などが影響していると推測される。今後はさらに対象数を増やして検討することが必要である。